

日本のモダニズム建築を訪ねる

——知られざる名建築をもとめて——（全 10 回）

第5回 完成形と原型としての教会堂： 世界平和記念聖堂

笠原一人（京都工芸繊維大学大学院助教）

はじめに

世界平和記念聖堂は、原爆の犠牲者への祈りを込めた記念聖堂として広島で建設され、1954年に竣工したカトリックの教会堂である。設計者は、日本近代を代表する建築家村野藤吾。村野はこの教会堂によって1956年に日本建築学会賞を受賞するなど、竣工当時から名作として高い評価を受けてきた作品である。そして近年は、近代建築再評価の高まりの中で、再び注目を集めている。2003年にはDOCOMOMO Japanの100選の1つに選定され、2006年には丹下健三設計の広島平和記念公園（1955年）とともに、戦後の建築として初めて国の重要文化財に指定され大きく新聞報道されたことは記憶に新しい。

したがってこの教会堂は50年以上に渡ってすでに多くの論者によって評され、その建築的な価値や歴史的意味は何度も語られてきた。ここで改めて新しい評価を提示することは難しい。だが筆者が所属する京都工芸繊維大学は5万点以上に上る村野藤吾の設計図面資料を所蔵しており、図面資料を通じた村野の研究を行っている。1998年に「村野藤吾の設計研究会」を設立し、1999年から10回にわたって「村野藤吾建築設計図展」を開催してきた。その成果は展覧会に合わせて毎回発行した図録『村野藤吾建築設計図展カタログ』や、2010年から発行している『村野藤吾研究』なる研究誌に反映されている¹⁾。そこで本稿では、世界平和記念聖堂の特徴や価値を改めて紹介するとともに、図面資料や近年の研究成果を元に、この教会堂の村野藤吾作品の中での意味や名作である所以を考えてみたい。

建設までの紆余曲折

世界平和記念聖堂の建設は紆余曲折を辿った。その経緯は石丸紀興著の『世界平和記念聖堂』（相模書房、1988年）に詳しく、ここでは概要を述べるに留

めるが、当初この教会堂は、村野自身が審査員の一人であった公開設計競技（コンペ）によって実施案が決定されることになっていた。コンペは実際に1948年に開催され、177点の案が応募された。応募要項では、「日本的性格」を持つ「モダン・スタイル」であることや「宗教的印象」を与えること、「記念建築としての荘厳性」を持つことが求められていた²⁾。しかしコンペでは1等案は選ばれず、2等に丹下健三案と井上一典案、3等に前川國男案が入選するなどして幕を閉じた。

1等案が選ばれなかった理由は、村野の他、今井兼次や堀口捨己、吉田鉄郎ら建築関係の審査員と3人の教会関係の審査員の「好み」の隔たりが大きかったからだとして、堀口が振り返っている³⁾。入選案はいずれもモダニズムの言語を駆使したものであったが、そこには「宗教的印象」、「記念建築としての荘厳性」が欠けていると、教会関係者に判断されたことが窺える。

結局コンペによる入選案は建設されなかったものの、教会堂建設の意思が潰えることはなかった。そこで、教会関係者や審査員の今井兼次によって、村野に実施案の設計が依頼された。村野は、自らがコンペの審査員であったことから拒否するが、周囲の強い要請により結局村野が設計に取り組み、現在の教会堂が完成したのであった。

コンペの審査員だった村野が教会堂を設計し実現したことは、当然のことながら議論を呼んだ。だが、その村野によって実現された世界平和記念聖堂は、コンペ案には見られなかった日本的性格や宗教性、記念性のすべてを備えたものであり、その過程についての批判をすべて払拭するような見事なものであると言えるだろう。

新しい教会堂の形

教会堂の様子を見てみよう。外観は、ドイツの建築家ポール・ボナツツの影響を受けて採用されたという、鉄筋コンクリート造の柱梁を日本の伝統建築の真壁風に露出し、壁面は広島で採取した土を用いたコンクリートブロックで埋めたものである（図1・2）。また聖堂の脇に建てられた高さ45mの塔がひととき目を引き、聖堂部分の上部にはゴシック様式を想起させるバットレスが並び、細部には日本の伝統的な文様である州浜型の装飾を備えている。一方聖堂の内部では、アーチが並ぶ簡素だがダイナミックなロマネスク風の空間が広が

り、ステンドグラスから荘厳な光が差し込むなど、教会堂の古典的な形式を備えている（図3）。これら様々な要素や特徴が破たんすることなく、一つの作品として見事に結実しているのである。それはモダニズムの方法に基づきながら、教会関係者を納得させるに十分な宗教性や記念性、そして日本的性格を備えたものであり、加えて手作りのような温かさをも感じさせる。コンペで問題となった不足を埋めるばかりか、日本の建築史上に類を見ない、全く新しい教会堂の形が誕生したのであった。

だがその完成へ至る創造の道のりは、険しいものであったようだ。設計の途上で村野が持参し提示した案は、なかなか教会関係者の賛同を得られず、「最後はやめる決心をして持っていったのが大体今の様な形である」という⁴⁾。京都工芸繊維大学美術工芸資料館に残されている図面は、そのことを裏付ける。特に外観のデザインは何度も推敲を重ねたようで、異なる形の案がいくつも存在する（図4・5）。そこに描かれた幾重にも重ねられた線には、すべての関係者を納得させる形態を模索し続ける村野の苦悩が窺える。



図1. 世界平和記念聖堂正面（撮影：笠原一人）



図2. 世界平和記念聖堂側面、脇に小聖堂がある（撮影：笠原一人）



図3. 世界平和記念聖堂内部（撮影：笠原一人）



図4. 世界平和記念聖堂立面検討案の一つ（所蔵：京都工芸繊維大学美術工芸資料館／AN. 4996-58）

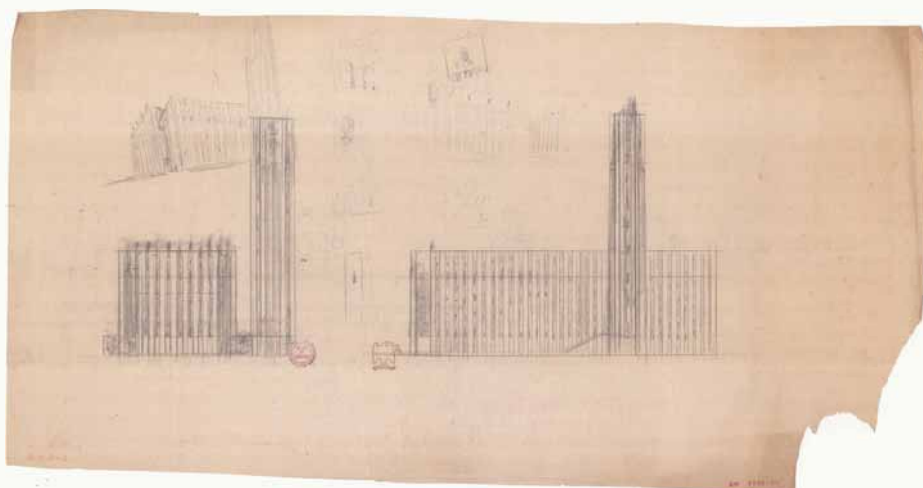


図5. 世界平和記念聖堂立面検討案の一つ（所蔵：京都工芸繊維大学美術工芸資料館／AN.4996-89）

完成形としての世界平和記念聖堂

ところで村野は、宝塚カトリック教会（1965年）や西宮トラピスチヌ修道院（1969年）、ルーテル神学大学チャペル（1969年）など、生涯に数多くの教会堂を設計している。そんな中で世界平和記念聖堂は、村野が設計した3つ目となる教会堂であった。最初の教会堂は、村野個人の作品としてほぼ最初に実現した南大阪教会（1928年）である。フランスの建築家オーギュスト・ペレー風のコンクリート造の塔と木造の平屋の聖堂の組み合わせという簡素で小さな作品である。その後村野は、戦時下に日本聖公会大阪聖ヤコブ教会（1939

年)にも取り組んでいる。これは、近年筆者が実現した村野作品であったことを図面資料から突き止めた、小さな木造の教会堂である⁵⁾。ゴシック風のバットレスを備えながら、簡素でモダンな教会堂であった。

つまり、世界平和記念聖堂までに村野が設計した教会堂は、いずれも聖堂の主構造が木造の簡素で小規模なものであり、村野の創造性を存分に発揮できたとは言い難いものであった。それらに比すれば、世界平和記念聖堂は、十分な大きさとデザイン上の新しさ、様々な要素を備えており、それらが破たんなくまとめ上げられている。村野の独自性が発揮された最初の、一つの完成形としての教会堂であったと言えるだろう。

原型としての世界平和記念聖堂

さらに興味深いのは、この教会堂が、その後の村野自身の作品に大きな影響を及ぼした、いわば原型として捉えることもできることであろう。村野は世界平和記念聖堂で採用したコンクリートの柱梁を外壁に現した真壁風のデザインを、1950年代から60年代にかけての多くの作品で用いている。関西大学簡文館(1955年)や横浜市庁舎(1959年)、早稲田大学文学部校舎(1962年)ほか複数の作品が挙げられる。様々な形に展開できる普遍的なデザインの原型を、村野は世界平和記念聖堂に見出したのであろう。

そしてもう一つ、聖堂の脇にある蓮の葉風の楕円形の平面を持つ小聖堂にも(図2)、後の村野作品の原型を見出すことができる。例えば、計画されただけでアンビルトに終わった飯田家納骨堂計画案(1951年設計)は、屋根の形状こそ違うが、世界平和記念聖堂の小聖堂に酷似している(図6)。京都工芸繊維大学美術工芸資料館に残された図面資料を見ると、1948年11月に描かれた世界平和記念聖堂の図面には、すでにこの形態を持つ小聖堂が見られる。つまり世界平和記念聖堂の設計過程で生み出されたものが、飯田家納骨堂計画案に転用されたと見られる⁶⁾。

また村野の死後、村野事務所によって設計され、新潟市内に建設された天寿園(1988年)の瞑想館は、やはり蓮の葉をイメージした平面を持つ。この建物は、元々谷村美術館(1983年)の計画の際に村野によって廃棄された案を基にして造られている。谷村美術館は彫刻家澤田政廣の木彫の仏像を展示する美術館である。これも一種の宗教的空間として構想されたと理解すれば、世界

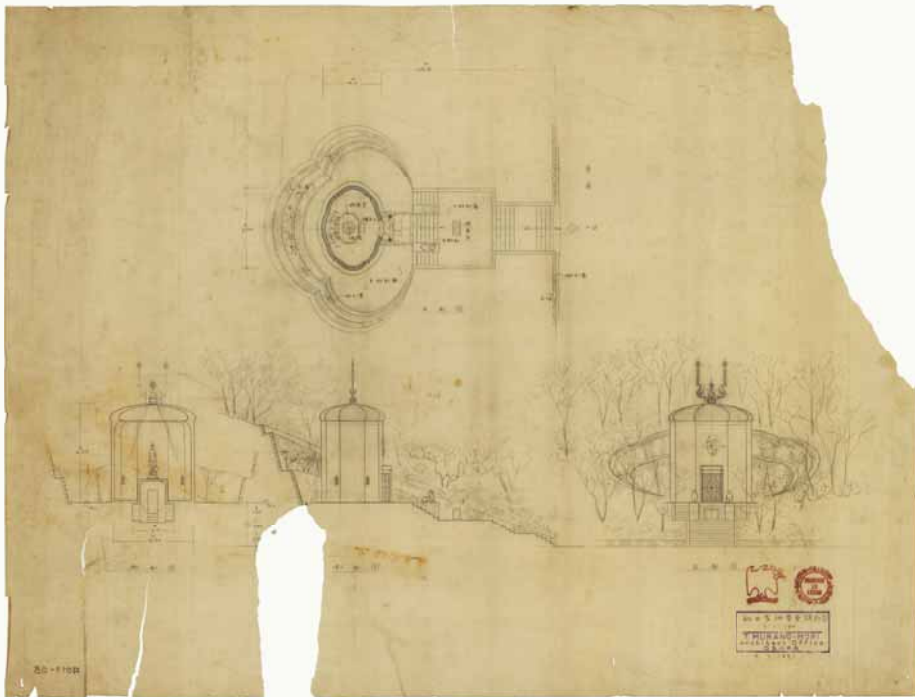


図6. 飯田家納骨堂計画案（所蔵：京都工芸繊維大学美術工芸資料館／#013-03）

平和記念聖堂に端を発する蓮の葉型の平面を持つ空間が、小聖堂的な空間として晩年まで繰り返し用いられたことになる。

おわりに

このように図面資料と照らし合わせながら村野の作品を振り返ると、世界平和記念聖堂は、村野の建築家としての活動の中であって、教会堂という形式の一つの完成形として存在し、同時にその後の村野の作品群に様々な展開する原型となっていたことが見えてくる。

考えてみれば名作とは、一つの完成形であると同時にその後に大きな影響を与える普遍的な作品に対して与えられる呼び名であるはずだ。世界平和記念聖堂は、その両方の条件を備えていたからこそ、名作になり得たのではないか。そしてそうなり得たのは、紆余曲折をたどったコンペと吟味を重ねた実施設計段階という、その過程に由来しているのかも知れない。

いずれにせよ、世界平和記念聖堂は日本近代が生んだ一つの名作として、今もなお多くの人々を魅了し続けている。

註

- 1) 世界平和記念聖堂については、第2回と第8回の村野藤吾建築設計図展で取り上げた。詳しくは、『村野藤吾建築設計図展カタログ2』、および『同8』を参照のこと
- 2) 広島カトリック教会編『平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集』、洪洋社、1949年
- 3) 堀口捨己「内輪話」、『建築雑誌』1956年6月号、日本建築学会
- 4) 村野藤吾「聖堂の建築」、『建築雑誌』1956年6月号、日本建築学会
- 5) 笠原一人「日本聖公会大阪聖ヤコブ教会―戦時下のパトロン湯浅伸銅の依頼による―」、『村野藤吾研究』第1号、村野藤吾の設計研究会、2010年
- 6) 笠原一人「飯田家納骨堂計画案―小聖堂の原型としての―」、『村野藤吾建築設計図展カタログ10』、京都工芸繊維大学美術工芸資料館・村野藤吾の設計研究会、2008年